

米調査報道史を探る(2) 世界一周に挑戦のブライ イ 食肉トラストを糾弾したシンクレア

タイトル(英)	A study of the history of US investigative reporting (2) (in Japanese)
著者	古賀 純一郎
雑誌名	茨城大学人文社会科学部紀要. 人文コミュニケーション学論集
号	5
ページ	1-26
発行年	2019-09
URL	http://doi.org/10.34405/00018112

米調査報道史を探る(2)

——世界一周に挑戦のブライ——

食肉トラストを糾弾したシンクレア

古賀 純一郎

要旨

米国の調査報道史の第2弾。今回は、100年前に捨て身の調査報道で活躍したネリー・ブライが世界一周に挑戦した論文の後半と、食肉トラストの闇を暴露したアプトン・シンクレアを紹介する。ブライの世界一周では、コスモポリタン誌の女性記者エリザベス・ビスランドの参加でマッチレースとなった。これにも触れる。シンクレアは当時野放しになっていた食肉工場の驚くほど非衛生的、かつ非人間的な労働環境を暴露。これを根底から改めさせることに大きく貢献した小説『The Jungle』を世に送り出し、世論そして政府を動かした。調査報道を専門とする記者（マックレイカー）の第一人者のひとりに数えられる。

第9章、新記録への挑戦

▽部数増のキャンペーン

ブライが世界的に知られるようになったのは前回の紀要で取り上げた潜入記『精神病院の10日間』と、今回紹介する『72日間世界一周』がきっかけである。史上初の快拳となる旅行記は、日本を含めた主要国の新聞に転載されたばかりか、単行本にまとめられると世界的なベストセラーとなり、「世界一有名な」、「世界初の」などの枕詞のつく超人気者となった。

女性記者がマスコミに珍しかった19世紀の後半。男性が挑戦しても難しい障壁を突破して後世に残る偉業を達成したことで大いに注目を浴びた。当時は、婦人参政権実現のための女権拡張運動が盛り上がっていた時代。女性が能力的に劣っていることは一切なく、努力次第で男性以上の成果や実績を上げられる好例と高く評価され、この実現を側面支援した。

ニューヨーク大のブルック・クロエガー教授によると、入社前の面接でブライがワールド紙に提案し、一度は却下されたこの企画が突然浮上したのは部数減とも関係があった。その頃、ブライはタイトルマッチのため練習中の米プロボクシングのヘビー級チャンピオンのジョン・L・サリバンのインタビューでアイルランド・ベルファストにいた。

当時の発行部数は34万6000部程度。注目を集めた記事もなく下降気味となっていた。このため数年前に部数を大きく伸ばす起爆剤となったニューヨークの象徴「自由の女神像」の

台座の募金キャンペーンに匹敵するビッグイベントを始める必要に迫られていた。

米国立公園局（National Park Service）のウェブサイトやアイリス・ノーブル著『世界の新聞王—ジョセフ・ピューリッツアー伝』によると、ニューヨーク・マンハッタン島の沖のリバティー島に立つ高さ47¹/₂の像は宗主国英国との戦争で独立を果たした自由の象徴としてフランス市民の献金により贈呈された。台座は当然米政府が用意すべきだった。だが、財政難で余裕がない。委員会を立ち上げ呼びかけたものの集まったのは、目標に満たない15万¹/₂だった。

これを知ったワールド紙の社主ピューリッツアーは、「フランスが素晴らしい贈り物を送ってくれるというのに、それを荷揚げする場所さえ用意できないというのであれば、ニューヨーク市、米国にとって拭い去ることのできない恥辱となろう」と紙面を通じて読者に寄付を呼びかけた。

その反響はすさまじく、募金は不足分を埋め合わせて十分すぎるほどの10万¹/₂に1886年8月に達した。なけなしの小銭を寄付した読者の手紙を紙面に掲載したのが奏功した。女神像はフランスから運搬され、同10月に贈呈式が開催された。ピューリッツアーのキャンペーンがニューヨークの象徴の完成に大きく貢献したのである。

ブライが挑戦した世界一周のアイデアは当時、映画にもなったフランスの作家ジュール・ヴェルヌ著の小説『80日間世界一周』がモチーフとなっていた。英語版の出版後10年以上が経過していたにもかかわらず、新記録樹立への挑戦者は誰も現れなかったのである。

▽突然の指令

指令は、1889年11月11日月曜日の夕に突然発せられた。「3日後に出発して欲しい」との編集長からの要請である。パスポート取得のため在ニューヨークの論説委員が急ぎょ駆り出され、ワシントンへ出向き國務長官に直談判。翌日に発行となった。

準備のためブライは翌朝、5番街の高級洋装店へ出向く。長くてゆったりした格子縞のブルーの旅行用コート注文した。3か月に及ぶ長い船旅で毎日着ても耐えられる素材を選んだ。加えて防水のしっかりした帽子、ブレスレット、イヤリング、革バンド、腕時計なども購入した。

縦40¹/₂、横20¹/₂の革製の旅行用鞆も入手、それに寝巻、化粧品、文具類、下着などを詰め込んだ。ワールド紙は支度金として200¹/₂の金とポンド札、それに2500¹/₂のドル紙幣を用意してくれた。

道中で執筆した記事は各地の電報局などから送付し、それが逐次掲載された。読者はブライの奮闘が手に取るように確認できた。

企画を盛り上げるためにピューリッツアーは記録がどの程度になるかを読者に懸賞で当てさせた。賞金は欧州への旅費に相当する現金である。

では、ブライの世界一周はどんな按配だったのか。連載を本にした『72日間世界一周』

をベースにその奮闘ぶりを紹介しよう。

第10章、ブライの旅行記

13章からなる旅行記は、第1章の「世界一周の提案」を除くと第2章「出発」、第3章「サウサンプトンからジュール家へ」、第4章「自宅でのジュール・ヴェルヌ」、第5章「プリンディジで」などで、経由地の様子、出来事、経験などを綴り、最後が第18章の「記録」である。

興味深いのは、ワールド紙随一の人気の女性記者ブライを向こうに回し、当時24歳の米コスモポリタン誌記者のエリザベス・ビスランドが編集長の突然の決断で世界一周旅行をスタートさせたことである。東回りのブライに対しビスランドは西回り。マッチレースとなった。このことは旅の後半の香港に到着するまでブライは知らなかった。ワールド紙があえて情報を提供しなかったとするのが適切だろう。ビスランドは論文の最後で触れる。

「What gave me the idea?(どうしてそのアイデアを思いついたのか)」で始まる第1章は企画をめぐるブライと編集長とのやり取りが中心。「80日以内で世界一周します。是非、行かせてほしい」と懇願するブライに編集長は、「社内でその企画が浮上し、男性記者が行くことになった」とのつれない返事。悪いと思ったのか「自分はブライの方がいいと考えているのだが」と慰めてくれた。それに対するブライの反応が面白い。猛然と反発し、「その男性を行かせなさい。私は同じ日に他の新聞から出発し、打ち負かしてやる」とたぎる闘志を見せつけた。結局、その話は中止となる。

「直ぐ来てもらえないか」。その約1年後、雨の降る夕方に編集長から声が掛かった。「何かへまをやらかしたのかな」といぶかりながら顔を出すといきなり、「明後日世界一周の旅へ出かけてくれないか」と切り出された。心臓の鼓動が一気に高まるのを感じながら「直ぐに行けます」と即座に応じた。

▽出発

3日後の11月14日木曜日の早朝。快晴、すべて順調。鞆を手にしたブライはハドソン川を挟んでマンハッタン対岸のホボケン3番通りに立っていた。岸壁には全長140^{フィート}の英国行き客船オーガスタ・ピクトリア号が横付けされていた。

ドイツの造船所で建造された流線型の豪華客船は、ブライの1等船室が364人、2等116人、3等695人の収容できる大きさ。ネット上で検索すると1888年に建造された勇姿が閲覧できる。進行方向に向けて3本の大きな煙突が天に向けて並んでいる。片方が故障しても航行を続けられる2軸スクリューを搭載した最新鋭の客船名はドイツ皇帝ウイヘルム2世の妻にちなんでいる。

米国から欧州に渡り、スエズ運河を抜けて、インド、香港、日本を経由する全工程は2万

8000^リ (4万4800^キ)。予定通りに行けば75日4時間で戻れる。

「元気でね」「健康にはくれぐれもご注意を」。埠頭には知り合いが見送りに来て、激励してくれた。「頭はふらふら、心臓は張り裂けそうだった」と旅行記に記している。

マシュー・グッドマン著『ヴェルヌの「八十日間世界一周」に挑む—4万5千キロを競ったふたりの女性記者』(柏書房)によると、その日のワールド紙の1面には、「世界一周一番の道のり」、「本紙記者が史上最速で地球を1周します」の大きな見出しが躍り、経路を示した地図が掲載されていた。

▽船酔いと闘い

初日は船酔いと闘いだっただけ。出航後、間もなく気分が悪くなり、縁へ駆け寄り海に向かって吐いていた。

仏ロココ調のインテリアの輝く1等船室客用の食堂での夕食にも顔を出した。テーブルでは船長の隣。気分が悪くて何度も中座し、終了後は部屋に戻ってそのまま寝た。翌日は夕方まで眠り続けたことで船酔いは何とか克服できた。翌日からは完食。同22日未明、16時間遅れで英南部の軍港サウサンプトンに到着した。

嬉しいことにワールド紙のロンドン特派員の迎えがあった。特派員は今回の計画のモチーフとなった小説『80日間世界一周』の著者で仏アミアン在住のヴェルヌから自宅への招待状が来ていると教えてくれた。

鉄道に乗り、ロンドンへ早朝に到着。わずか4時間の滞在を有効利用するため貸し切り馬車でトラファルガー広場などを駆け足で見物。その後、広場に隣接するチャリング・クロス駅から特派員と汽車に同乗し、フォークストンへ。英仏海峡を船で渡り、鉄道で一路アミアンへ。駅には夫妻が出迎えてくれた。付添兼通訳の特派員と馬車に乗り、ヴェルヌの豪邸へ。暖炉のある部屋で面談、小説執筆の苦労話などを聞いた。

記録達成の使命を負うブライは、後ろ髪をひかれながらも仏カレーへ。スエズ運河行きの客船が停泊するイタリア・ブリンディジ行きの列車に乗った。3時間半遅れの到着だったが乗船できた。

この辺りは、旅行記の第3章「サウサンプトンからジュール・ヴェルヌ家」、第4章「自宅のジュール・ヴェルヌ」、第5章「伊ブリンディジへ」、第6章「米国籍の相続人」に詳しい。

面談の記事は、同行した特派員が執筆し、2日後のワールド紙に掲載された。この記事が欧州、日本のメディアに転電され、前代未聞の挑戦が世界的に知られるようになった。

▽スエズ運河経由で中東、アジアへ

航海中に巨額の遺産を相続した資産家との噂が立ち、これを真に受けた英子爵など3人から求婚されるハプニングもあった。

燃料補給のため停泊したスエズ運河最北のエジプト・ポートサイドで同27日午後下船し、

街を見物。それを綴った第7章「美しい2つの目」は“世界一荒廃した”との異名のある街で出会った目の美しい少年や乗船客へ殺到する乞食に困惑した体験を描いている。

全長160^{キロ}超の通過には丸1日を要した。安全確保のため運行速度に制限があったためだ。紅海を経由してイエメンのアデンへ12月2日に到着。危険を案じた船員は停泊中に下船しないよう乗客らに要請したが、ブライらはこれを無視。その中身は第8章「アデンからコロomboへ」に綴られている。

世界一周が大きな反響を呼んだのは100年以上前の当時、男性でさえも危ない未開の地の一人旅にうら若き女性が単身で積極果敢にチャレンジしたことが大きい。これが読者の好奇心と興味をくすぐり、未知の世界に対する関心や道中での出来事などが共感を呼んだ。

世界各地を訪問する旅は現在でもテレビ、雑誌はもちろん最近ではネット上でも高い人気を誇っている。経費はかかるが視聴率を期待できる一種のキラコンテツなのであろう。「世界を冒険する」と銘打った1985年にスタートの有料の米衛星放送「ディスカバリーチャンネル」は、世界で4億人超が視聴するほどの高い人気を誇る。テレビ、ラジオはもちろんネット上のサイバー空間もないこの時代、世界を探求する途方もない冒険に読者の好奇心は大いにそそられたのである。

19世紀後半、読者のほとんど誰もが訪れたことのない欧州、中東、アジアの主要都市を渡り歩き、足で稼ぐ、あるいは見聞きし、その体験をまとめた手記が注目を浴びたのは当然であろう。

旅行の開始と同時にワールド紙は、読者の反応をまとめる担当を置き、同時に、「ネリー・ブライの冒険、世間の反響を呼ぶ」のコーナーを設け、他紙の記事も掲載した。「何歳」、「身長は」などの読者の質問にも丁寧に答えた。

ブライは、面白おかしく綴った寄港地や観光地の様子、食事、市民の生活、特異な体験などの記事を到着した都市からワールド紙へ送付し、それが紙面を飾り、人気を博した。

アラビア海を横切り、サンゴ礁に囲まれたスリランカの港コロomboに到着したのが12月8日。上陸して白亜のホテルに2日間宿泊、国際色豊かな街で中華料理、イタリアのスパゲティ、ドイツのビール、現地のカレーなどさまざまな料理を楽しんだ。

食後は市内に繰り出し観光地を歩いた。2日の予定が5日に伸び、シンガポール、香港経由で東京へ。この辺りは第9章、「5日間の遅れ」、第10章「海賊の海で」、第11章「季節風に逆らって」、第12章「英国の中国」に詳しい。

冒頭で触れたが小さな鞆しか持たないブライは荷物の増えるのが嫌で土産をほとんど買わなかった。だが、シンガポールで訪れたヒンズー教寺院の道端で売っていた子ザルを見た途端に欲しくなり、購入した。「旅の友になるだろう」と思ったからだ。1匹を籠に入れて持ち運び、結局ニューヨークまで持ち帰ることになる。

▽ミカドの国

マラッカ海峡に入ると台風の洗礼を受ける。クリスマスイブは荒れる波に翻弄されたが、翌日の12月25日明け方、香港に到着した。39日目である。東京行きの船が出発したのは、同28日午後だった。

ブライはこの間、驚くべき話を耳にする。世界一周旅行の記録樹立を目指す別の米女性記者が「3日前にここを発った」との衝撃的な情報である。一瞬、気が動転したが「編集長と75日間で世界一周すると約束しただけ」「それが出来れば満足」と考え直して落ち着きを取り戻した。

香港では、虐さを極めたさまざまな拷問の施設や処刑場などを見学した。第13章「広東のクリスマス」に記している。次は待ちに待った日本の訪問。第14章「ミカドの国へ」、第15章「日本の120時間」で紹介している。新年を洋上の船の上で迎えたブライは、正月を日本で過ごすことになる。

興味深いのは、驚くほど好意的な視線で日本を見つめている。いたく気に入ったようで、褒めちぎった表現が随所にちりばめられている。直前の香港で幻滅するような体験をしたためか、中国との比較が余りにも多い。

冒頭から、「美しい」「母国を捨てても良い」「女性は魅力的なほど愛らしい」「男性は驚くほど賢いとの評価もある」と手放しで賛美する表現が散りばめられている。

そればかりではない。滞在中に東京や鎌倉を訪問し、神社仏閣や元旦の儀式、日常に触れた体験をベースに、「日本人と中国人は正反対」「世界一清潔な人」「中国人は最悪」「いつも幸せで快活」「中国人はいつも機嫌が悪く気難しい」。「端的に言えば、日本人は最高に楽しいが中国人は、最も不快」などと持ち上げている。

ブライが訪れた当時の中国は、アヘン戦争で敗れたのを契機に、列強による中国の分割、支配が続いていた。「眠れる獅子」「死せる豚」と軽んじられていた時代であることを考慮すると、中国人をことさら見下す傾向があったのかもしれない。

5日後の1890年1月7日に日本を発った。出航の際に港の岸壁で、地元の楽隊がさまざまな曲を演奏してくれた。「素敵な国から去るのはつらかった」「見えなくなるまでハンカチを振っていたので腕が一日中痛かった」と旅行記に記している。

あとは米国へ帰るだけ。幸運なことに熱心に応援してくれる航海士が船内にいた。「ネリー・ブライのため勝つか死ぬか 1890年1月20日」。予定より2日早い到着目標を書き込んだ張り紙を機関室に掲げてくれた。「失敗したらニューヨークに戻らない」と駄々を拗ねると機関長は、「そんなこと言わないでよ、お嬢さん」と励ましてくれた。

第11章、米国上陸

▽記録樹立

強風の嵐にも遭遇し、酷い目にあつたが何とか乗り切り、1月21日朝サンフランシスコ湾へ入った。

不運なことに、米西部を襲った建国来初めてという豪雪で交通網は完全にマヒしていた。このため港から少し離れたオークランドからワールド紙の用意した南回りの臨時列車でシカゴを目指した。シンガポールからのサルと一緒にいる。この頃には米国の全紙が記録樹立を目前にしたブライの帰国を伝えており、「一目見たい」と到着する駅ごとに群衆が押しかけ、大きな歓声に包まれての到着、出発であった。

カリフォルニア州のマーセド、フレズノ駅などで大歓迎を受けた。待機していた楽隊が当時流行していた「青い目のネリー」などを演奏してくれた。大きな花輪、花束、果物、ワインなどを贈呈された。到着した駅から地元紙の記者が列車に乗り込んできて、インタビューも受けた。「自分は有名人になったんだ」と次第に自覚するようになった。

カリフォルニア州、ネバダ州、アリゾナ州などにまたがるモハーベ砂漠を越え、ニューメキシコ州へ。駅に泊まるたびに後部に設けられたデッキに出て、出迎えの観衆と握手を交わし、サインに応じた。全米から祝電が続々と届いた。カンザス州を抜けて、シカゴに1月24日午前7時過ぎに到着した。オークランドから69時間。これは当時の米国の鉄道の区間記録だった。

代表らの案内で地元の記者達による歓迎会に出席した。朝食を終えて取引所に寄ると、今度は、万歳三唱の洗礼を受け、駅へ戻ると人だかりができていた。ニューヨーク行きの列車は、午前10時半に出発、列車のブライの部屋には花束が一杯で、壁には日本でプレゼントされた琵琶が掛けられていた。記録樹立を祝うフランスのヴェルヌ夫妻からの電報もあった。ペンシルベニア駅からは各駅停車となった。コロンバス、ピッツバーグ、ハリスバーグの駅でそれぞれ停車し、いずれも熱狂的な歓迎を受けた。

ピークとなったのがフィラデルフィアのブロード・ストリート駅で、停車すると同時に約5000人の群衆に取り囲まれた。待っていたブライの母親が報道関係者らと一緒に客車に乗り込み、出発地であるマンハッタン対岸のジャージー・シティを目指した。

1月25日午後3時51分44秒に駅に到着、ブライは72日6時間11分14秒の世界一周の記録を樹立したのである。

ハドソン川を挟んで向かい側のバッテリー公園で祝砲がとどろいた。同時に、湾内に停泊していた汽船やフェリーなどが一斉に汽笛を鳴らして到着を祝ってくれた。到着した駅では、市民から万歳三唱の声が再び挙がった。

駅前に用意された馬車に乗り、フェリーでマンハッタン島へ渡り、ワールド紙の本社へ向かった。この段階で、ブライを先頭にした一行は、帰還の凱旋パレードと化していた。通り

には大観衆があふれ、熱烈な歓迎を受けた。本社編集局でも歓迎会が用意されていた。

第12章、山あれば谷あり

▽陰悪化

「時の神を打ち負かした」「ヴェルヌの作り話は色褪せた」「比類なき偉業」。『ヴェルヌの「八十日間世界一周」に挑む』によると、帰国後の記事は、こんな見出しで26日ワールド紙日曜版の一面を飾った。格子柄のコートに手提げ鞆姿のブライのイラストも添えられていた。

「全欧州が興奮の渦に巻き込まれた」との見出しで欧州に派遣された特派員発のスエズ運河を建設したフランス人のフェルディナンド・レセップスのほか地理学者、科学者、ジャーナリストらの讃辞のコメントがあまた掲載されていた。発行部数は28万0340部で直近の日曜版の最高記録となった。

ブライ人気にあやかって名前を冠した日用品が続々と登場した。帽子、ドレス、手袋、人形のほかブライを起用した広告さえも登場した。直後からニューヨークを皮切りにフィラデルフィア、シカゴなど全米を巡る講演旅行がスタートした。

ブライにとっては、嬉しい悲鳴なのだろうが、こうした人気の過熱は、ワールド紙との間に次第に軋轢を生み始める。ブライ印の新製品や日用品、講演などを個人的な仕事と判断し、署名記事がパタリと紙面から消えていた。人気の高まりと反比例し、「やりすぎ」「傲慢」などと嫉妬する声も挙がり始めた。「下品な目立ちたがり屋」との辛辣な批評が地方紙に掲載され始めた。

前人未到の偉業達成で、当然、その見返りがあってしかるべきとのブライの思惑とは裏腹に、それが一切なく、この頃から同紙との関係が陰悪になり始めた。講演旅行などでブライは個人的な収入を増やした。1万ドル近くを稼いだとの記述もある。同紙は、見返りはそれで十分とみていたふしがある。

この溝は埋まることはなく、ブライは最終的には同紙を去った。匿名による取材に対しピュリツァーから感謝の言葉や特別の報酬が一切なかったことを理由として挙げている。

▽復帰、結婚

年収2万5000ドルの第一級の高給取り記者から一転してフリーとなったブライは生活費を稼ぐ必要に迫られた。直後にニューヨークの家庭向け週刊紙に小説を寄稿する3年間4万ドルの契約を結ぶ。これを知ったワールド紙から復帰の誘いもあったがきっぱり断った。

その一方で、ワールド紙はブライの絡む名誉棄損の訴訟を抱えていた。実はニューヨーク州議会の腐敗ぶりを暴露した記事に絡み報道の矢面に立った議員から名誉棄損の告発を受けていたのである。

裁判所からの求めでブライに証言を要請したが、講演を理由に断られた。同紙はこの裁判で敗訴し2万ドルの賠償金の支払いを余儀なくされた。これは、女性社員30人超分の報酬に匹敵する。世界的な評判を呼んだ旅行記を書いたブライに対して同紙が冷たかったのはこうした不満も背景にあったことが推察される。敗訴後、ピューリツァーはそれまで以上に記事の正確性を記者に対して求めるようになった。

それから2年半が経過した1893年9月17日のワールド紙朝刊一面トップに退社したはずのブライの署名入りのインタビュー記事が掲載された。主見出しは「ネリー・ブライが本紙へ復帰」。電撃的なカムバックを伝える見出しだった。同紙にとってブライは、部数が稼げるかけがえのないスターライター（記者）だったのである。

初回の相手は、前回の紀要で触れた無政府主義者の超大物エマ・ゴールドマン。重複するため記事の紹介は避けるが、これを契機にブライによる各界の知名人女性への突撃インタビューが始まった。

著名な女性弁護士で婦人参政権の実現を目指す女権拡張運動の闘士、大物閣僚の妻などが続いた。得意の潜入取材も再開され、ニューヨーク市警の汚職、劣悪な刑務所の実態や労働運動に対する資本家側の冷酷な弾圧の暴露なども手掛けた。

復帰は、部数の低迷が続いていたワールド紙が持ちかけた。新聞を恋しく感じていたからブライは素直に応じた。

喧嘩別れのような形で退社したことから不安定な立場に甘んじていたブライ。これを機に世界一周の偉業を成し遂げたニューヨーク随一の日刊紙の著名ジャーナリスの看板を引っ提げて社交界に華々しくデビュー、上流社会の人気をかっさらった。大勢の集まるにぎやかな宴席にブライが姿を現すと会話がピタリと止み、話題の中心人物となった。

そうした中で30歳にならんとするブライは95年春、突然結婚した。相手は親子ほどの年齢差のある70代の資産家のロバート・シーモン。従業員1500人を抱える鉄工所を経営する実業家である。2人の出会いは文献によって大きく異なる。

『世界の間人像3』に掲載されている「音楽会の開かれた夜に出会い、交際を続けた結果」のほかMartha. E. Kendal著『Nellie Bly-Reporter of the world』は、「シカゴのホテルで開かれた晩餐会で出会い、2週間後に結婚した」、マシュー・グッドマン著の『ヴェルヌの「80日間世界1周に」挑む』だと「シカゴに向かう列車の中で出会い、その週のうちに駆け落ちした」など。なぜ、これほどの違うのかと戸惑うほどである。結婚後はニューヨークの高級住宅街5番街で暮らし、富裕層たちとの交流に明け暮れた。ブライは、若い頃から億万長者と結婚する一の夢を持っていた。これが実現されたことになる。

1825年生まれシーモンについては親切、儀正しい、威厳がある、美男子などの評価がある。ネット上で検索すると、白髪の初老の写真が登場する。確かに、好感のもてる人物である。亡くなった前妻との間に8人子供がいて、うち3人は夭折したようである。

結婚と相前後し、ワールド紙をいったんは辞めたが95年9月に復帰した。カリフォルニア

州出身で後にピュリツァーと並び新聞王と呼ばれるウィリアム・R・ハーストの買収したニューヨーク・ジャーナル紙からワールド紙に対する引き抜き攻勢があり、記者が減り、声が掛ったためである。

9年後の1904年には夫のシーモンが急逝、ブライは経営に意欲を示したが、特許権の侵害などのトラブルが発生、工場が火事となる不運や経理での不明朗な支出などが発覚し結局、倒産した。

第13章、海外脱出と大往生

倒産に絡むトラブルを嫌ったブライは14年夏、国外へ脱出。落ち着き先はオーストリア・ハンガリー帝国のウィーン。第一次世界大戦の引き金となるオーストリア皇太子夫妻が狂信的な愛国青年に暗殺され、これを受けてセルビアへ宣戦布告した直後だった。仕事での一時帰国をはさみ計5年滞在することになる。

ジャーナリスト魂を揺さぶられたのか、死闘が繰り広げられている前線まで足を延ばし、現地のルボをワールド紙のライバルのニューヨーク・ジャーナル紙へ寄稿した。滞在中に興味を持ったのが戦争地域への支援活動、戦災孤児などの世話だった。

1915年の第一次大戦への米国の参戦は、ブライにとっては悪夢となった。滞在中のオーストリアは、米国の敵対国。このためオーストリアの友人に預けたブライの株式などが敵国の資産と認定されて、米政府に接収された。大戦終結でブライは帰国。これは、結局、戻らなかった。

無一文となったため記者としての活動を再び決意する。ワールド紙時代の友人のついでにニューヨーク・イブニング・ジャーナル紙へ寄稿を開始、同時に慈善事業に生きがいを見出すようになった。だが、体力の衰えは止まらず22年1月、肺炎で死亡。57歳だった。

著名なジャーナリストということもあってAP通信をはじめとするニューヨークのメディアは死亡記事を配信、掲載した。ニューヨーク・タイムズ紙は、40歳以上も年上のシーモンとの結婚や引き継いだ会社経営について触れ、「幸運が裏返った。従業員による偽装などが相次ぎ、倒産。訴訟で資産を使い尽くした。残る勇気と元気でジャーナリズムに復帰した」などと論評した。ワールド紙も死亡記事欄で紹介し、死去した日が世界一周記録を打ち立てた2日前の1月14日だったと伝えた。

第14章、エリザベス・ビスランド

▽知日派文芸記者

論文を終える前にネリー・ブライの挑戦した世界一周で記録を争ったライバル、米コスモポリタン誌の女性記者エリザベス・ビスランドについて触れたい。

突撃型の潜行取材による調査報道が得意のブライに対して、上司の命で慌ただしく参加したビスランドは詩や芸術の論評などを手掛けるいわゆる文芸記者。鎖国で世界から忘れ去られていた日本の文化を西洋人の立場から研究した小泉八雲ことラフカディオ・ハーンと親交のあったビスランドはその評伝『Life and Letters of Lafcadio Hern(ラフカディオ・ハーンの人生と書簡)』を1906年に著し、ハーンの挙げた優れた業績を世界に初めて紹介したことでも知られている。

世界1週の旅行記で立ち寄った日本についてブライと同様驚くほど好意的な視線で描いている。帰国後、弁護士兼企業家の大富豪と結婚したビスランドは、傑出した容姿や優雅さ、教養などが高く評価され、米社交界で知名度を上げた。文化面のみならず外交面でも支援活動を米国で展開し、日本とのゆかりが驚嘆するほど深い。

ビスランドについては、マシュー・グッドマン著の『ヴェルヌの「八十日間世界1周」に挑む』や工藤美代子著の『夢の途上ーラフカディオ・ハーンの生涯【アメリカ編】』、『神々の国ーラフカディオ・ハーンの生涯【日本編】』、自身の執筆による『Life and Letters of Lafcadio Hern 1,2』に詳しい。これらを参考に紹介しよう。

ビスランドは南北戦争で激しい攻防が続いていたさ中の1861年2月、米南部ルイジアナ州フェアファックスで大農園を経営する裕福な家に生まれた。あたりは、戦場となり一家は母親の実家のニューヨークへ疎開していた。

祖先に英国のメアリー女王の直系やエリザベス朝時代のロンドン市長を務めた準男爵、米国の開拓時代に活躍したウィリアム・ペンなどと姻戚関係があり、いわゆる血筋が良い方に分類される。一家は、奴隷を使った綿花栽培で莫大な資産を築き上げていた。

もともと、戦いによって経営は破綻し、戦後の生活は一変した。「家計の足しになれば」とニューヨーク出身の母のマーガレットは文才を生かして地元紙ニューオリンズ・デモクラットヘエッセイなどを寄稿。20歳になったのを機にビスランドも投稿するようになる。

▽ラフカディオ・ハーン

その筆力がたまたま同紙の文芸部長だったアイルランド出身のハーンの目に留まる。ハーンが声を掛けたのか詳細は判然としないが、行動力のある積極派ビスランドは、ニューオリンズへ転居し、同紙の女性向け紙面の担当記者となる。

筆が立つのに加えて「洗練された上品で教養のある貴婦人」「指折りの美人」「悪魔のように美しい」などの容貌で知られるビスランドは3年後、ニューヨーク・マンハッタンの住民

となっていた。南部の生活に息苦しさを感じていたことや米経済の中心ニューヨークで一旗揚げたいとの気持ちが高じていたようである。ハーンも追うようにニューヨークへ転居している。

友人の複数の紹介状を携えたビスランドは、地元紙ニューヨーク・サンをはじめとしてコスモポリタン誌、ピュリツァーのニューヨーク・ワールド紙、シカゴ・トリビューン紙などさまざまなメディアへ記事を執筆するようになった。ブライの2万5000ドルには及ばないが、年取も1万ドル程度まで膨らんでいた。

ハリウッド女優に勝るとも劣らない美貌は工藤美代子著『夢の途上』が収録している10代の頃の肖像画や晩年の本人の写真などで確認できる。

▽世界一周に挑戦

そして運命の1889年11月14日がやってきた。その日の朝ブライは既に東回りで世界一周へ旅立っていた。ビスランドが2年後の1891年に出版した旅行記『A Flying Trip Around the World(世界一周の慌ただしい旅)』によると、その日午前8時に起床、朝食を取り、新聞に目を通していると、コスモポリタン誌の編集長から直ぐに来てほしいとの連絡を午前10時半に受けた。「何だろう」といぶかりながらも自宅に近い同誌へ出かけると、待ち構えた雑誌のオーナーや編集長から「本日午後にサンフランシスコに向かい、世界一周の旅へ出てほしい」との要請があった。ビスランドは、①旅行に興味が無い②明日自宅で主宰するパーティがあり、無理③突然の要請で着ていく服がない—などと断りの理由を並べ立てた。

だが、編集長らは諦めない。世界旅行への挑戦と引き換えに正社員に採用すると好条件を付きつけられた。説得されること半時間、ビスランドは、「自分の名前が新聞の一面トップに掲載されるのも悪くない」と考え直し、受け入れたのである。

パーティのキャンセルを友人らへ連絡。旅行用具を詰め込んだトランクを引っ提げてマンハッタン中央のグランドセントラル駅にその日の夕方、立っていた。レースが始まったのである。

挑戦状を叩きつけるようにブライとは真逆の西回りで記録に挑んだ。なぜ、オーナーらは唐突な提案をしたのか。それは、ワールド紙の報道で計画を知ったのがきっかけだった。同誌が女性記者の派遣をぶつければ2つのメディアが張り合う形となり、大きな話題になると考えた。さらには、西回りだとブライより2日程度早く帰国でき、ワールド紙の鼻を明かせるとの読みがあった。白羽の矢が立ったのはその行動力が評価されてのことだ。

もともと、結果は5日遅れとなり、涙を飲んだ。なぜ負けたかについてのビスランドは、『A Flying Trip Around the World』の最終章で、帰国直前の欧州で経験した不思議な出来事を書き綴っている。何としてもブライに勝たせるための企てたワールド紙の“陰謀”が背後にあったことを匂わせている。『ヴェルヌの「八十日間世界一周」に挑む』にもこれは詳しい。

内容はこうである。フランス到着後、米ニューヨークへ戻る経路は2つあった。客船を利

用し英国海峡を渡り、英サウサンプトン経由で帰国する。もうひとつはパリからル・アーブル経由で出発を遅らせてもらった客船ラ・シャンパーニュ号に乗船する。後者を選べばレースに勝てる。

ビスランドは2つ目を選択し、パリへ向かうためヴィルヌーブ・サン・ジョルジェ駅に着いた。すると旅行代理店の代理人と名乗るパリから来た若いフランス人男性が近づいてきた。この男は、港でビスランドの到着を待っているにも拘わらず、客船は「定刻通りに出発した」とのフェイク、ウソの情報を伝えたのである。これを信じたビスランドは落胆しつつロンドンへ向かった。だが、悪いことは重なるもので、サウサンプトン発客船の運休を知る。計画を再度変更し、アイルランドのクイーンズタウン発の客船で帰国した。これが苦杯をなめた顛末である。

3時間半以上も港で客船が待っていたのにもかかわらずなぜ偽情報もたらされたのか、あの男は一体誰だったのか。プライを勝たせるため同紙がイカサマ情報を伝えるエージェントを雇ったのか。コスモポリタン側は旅行代理店などに詳細の釈明を求めた。だが、納得いく説明はなかった。

▽おとぎの国日本

良いこともあった。世界一周の途中で立ち寄った日本が“fairy land(おとぎの国)”と知り、大ファンとなった。この点は、プライと同じである。ネット上にアップされている『*A Flying Trip Around the World*』のサイトの第3章を閲覧すれば確認できる。

船が横浜港に到着した時の第一印象をビスランドは、「夢見ていたよりさらに不思議で素晴らしい国」「ピンク色の真珠の山がせり出し、妖精の住む緑の丘を見つけた」「エデンの園があった」と驚きの声をあげている。

わずか2日間だったが、超スピードで名所旧跡を訪問し、さまざまな体験をしている。プライも宿泊することになるグランドホテルを拠点に、便利な人力車を利用し横浜の外国人居留地を散策、車夫の独特な姿に驚き、外国人には珍しい着物姿の通行人や若い娘、道路沿いの商店街の店頭に掲げられた提灯、清潔な野菜や果物がきれいに並べられた八百屋、呉服店、マッチ箱のような狭い家などを鋭い観察眼で描いている。数セントを払って劇場を訪れ、歌舞伎や曲芸なども観劇した。

ままごと遊びに登場しそうなカワイイ鉄道を利用し、東京まで出かけた。駐日米国代表を務め、在留2年となる主計官兼海軍大尉のミッチェル・マグドナルドの自宅に招かれた。お茶と食事が主たる目的。皇居や徳川家の将軍が眠る芝の増上寺を中心に神社仏閣なども回った。上野公園では夕陽が富士山に沈むのをみた。

旅行記には、「おとぎの国」との言葉が頻繁に登場する。これは、赤ん坊に見える日本の若い娘を筆頭に、はいている下駄や着ている衣服、汽車の大きさなどどれもこれも、すべてが小さく、まるで玩具のような印象を持ったためのようだ。とても友好的で笑顔を崩さない

日本人にも感激している。

ビスランドは、帰国後、日本に対する高い評価をハーンへ伝えたようだ。ハーンは以前から日本の美術や文化に多大な関心を抱く在ニューヨークの美術記者との付き合いがあり、日本への興味を募らせていた。ビスランドの評価がハーンの日本行きの背中を押したとも言えるだろう。

▽ハーンとビスランド

翌年4月ハーンは、モントリオール、バンクーバー経由で横浜に到着した。カナダ太平洋鉄道が路線の宣伝のため要請していた旅行記の執筆を引き受けたことによる。旅費、経費などはすべて鉄道が提供した。

ビスランドはここにも顔を出す。前年の日本滞在で知己を得た米国代表のマグドナルド宛のハーンの紹介状をしたため、持たせた。到着後、マクドナルドと直ちに面談し、ウマが合ったのか、2人は生涯の友となるのである。

ハーンは、くだんの美術記者の紹介で東京帝国大学教授ウィリアム・H・チェンバレンの知己を得て、その斡旋で英語教師のポストを見つけ、そのまま日本に居つくことになる。

ビスランドはハーン没の2年後、初の評伝『Life and Letters of Lafcadio Hearn(ラフカディオ・ハーンの人生と書簡)』を2冊にまとめ1906年12月に出版した。当時多くの書評に取り上げられ、好評を博した。印税は当時困窮していたハーンの遺族に贈られるように手配した。

2人の交わした手紙が多数含まれているが、興味深いことに、ハーンの手紙に書かれているビスランドへの愛情表現などはすべて削除されていることが後の研究で判明している。むしろ、ハーンの一方向的な思いがビスランドによって削除されていたというべきだろう。中には「ハーンの手紙のエネルギーはビスランドにあった」との指摘さえもある。

ビスランドにすれば、自分がジャーナリズムの世界に入るきっかけを作ってくれた恩義があったのは間違いないだろう。さらには、同じ職場で机を並べた上司であり腕利きジャーナリストでもあったハーンへの尊敬と敬意もあったのかもしれない。

ビスランドは世界一周から2年後の1891年に弁護士で富豪のチャールズ・ウェストモアと結婚、大豪邸での生活が始まった。その後は、米社交界での付き合いに力点を置き、筆を一時折った形となった。50歳の記念ということなのか1911年4月には旅行で北東アジアを訪れ、その大半を日本滞在に費やした。ビスランドはその時の日本の印象を「明るく、洗練され、はかなげだ。斬新で奇抜な想像力に富み、控えめな優美さを備え、花のように静か」と形容している。

ビスランドは夫の急逝後の1922年にも日本訪問を含めた7か月間の旅に出ている。帰国後の24年には、ワシントンの屋敷を売り払い転居、バージニア州の田舎で生活をスタートさせた。日本最賃が高じて自宅の裏にはあずま屋を建てている。27年には日本での旅などのエッセイ集を出し、その2年後の1929年1月に肺炎で亡くなった。67歳だった。子供がいな

かったため莫大な遺産の処分に困ったようだ。

調査報道を得意とするブライと、ハーンを通じて日本の文化などを初めて世界に紹介した文芸記者ビスランド。ジャーナリストとしての交流は2人にはなかった。だが、100年前の世界一周で争ったふたりがいずれも親日家で、特にビスランドは、ラフカディオ・ハーンを世界に紹介した人物だったということは、筆者にとって驚きだったのである。(終)

◎参考文献

【ネリー・ブライ】

- ・ Brook Kroeger *Nellie Bly: Daredevil, Reporter, Feminist* Times books, 1994)
- ・ Denis Brian *Pulitzer A life* John Wiley & Sons, Inc. 2001
- ・ Martha E. Kendall *Nellie Bly- Reporter for the world* The Millbrook Press, 1992
- ・ Nelly Bly *Around the world in seventy-two days* Wildside Press, 2009
- ・ Nelly Bly *Ten weeks in a Mad-house* Wildside Press, 2009 weeksはdaysの誤植だと思われる
- ・ Mark Twain& Charles Dudley Warner *The Gilded Age- A Tale of Today* Gabriel Wells, 1873
- ・ アイリス・ノーブル著『世界の新聞王ージョセフ・ピューリッツァ伝』(講談社、1958年、佐藤亮一訳)
- ・ 角川書店編集部『世界の間人像3』(角川書店、1961年)ここに「世界初の婦人記者ーネリー・ブライ」の論文が盛り込まれている
- ・ W・A・スウォンバーグ著『ピューリッツァーーアメリカ新聞界の巨人』(早川書房、1988年、木下秀夫訳)
- ・ 本田創造監修『アメリカの歴史第4巻 アメリカ社会と第一次大戦』(三省堂、1996年)
- ・ ハーバード・G・ガットマン著『金ぴか時代のアメリカ』(平凡社、1986年、訳者天下尚一など)
- ・ マッシュー・グッドマン著『ヴェルヌの「八十日間世界一周」に挑むー4万五千キロを競ったふたりの女性記者』(柏書房、2013年、金原瑞人・井上里訳)
- ・ 矢野寛治著『伊藤野江と代準介』(弦書房、2012年)

【エリザベス・ビスランド】

- ・ Elizabeth Bisland *Life and Letters of Lafcadio Hearn 1* Boston: Houghton Mifflin & Co, 1906)
- ・ Elizabeth Bisland *Life and Letters of Lafcadio Hearn 2* Boston: Houghton Mifflin & Co, 1906)
- ・ E・ステューブンスン著『評伝ラフカディオ・ハーン』(恒文社、1984年、遠藤勝訳)
- ・ 工藤美代子著『夢の途上ーラフカディオ・ハーンの生涯【アメリカ編】』(集英社、1997年)
- ・ 工藤美代子著『神々の国ーラフカディオ・ハーンの生涯【日本編】』(集英社、2003年)
- ・ 白神栄子著『ラフカディオ・ハーン研究ー愛と女性と』(旺史社、1993年)
- ・ 高木大幹著『小泉八雲ーその日本学』(リプロボート、1986年)
- ・ 森亮著『小泉八雲の文学』(恒文社、1980年)

【デジタル】

- ・ Nellie Bly-The Pioneer of Woman journalist (<http://www.nellieblyonline.com/bio>)
- ・ Elizabeth Bisland *In seven stage- A flying trip around the world* (<http://digital.library.upenn.edu/women/bisland/stages/stages.html>)

(2) 社会主義者アプトン・シンクレア『The Jungle』で新境地を開拓

第1章、社会主義社会を目指して

米調査報道史の連載に登場する2人目は、調査報道のパイオニアといわれるアイダ・ターベルと同じく、今から100年前に活躍した社会派の作家アプトン・シンクレアである。

社会主義社会の建設を目指す米社会党員で日本の文壇ではプロレタリア作家に分類される。シンクレアはカール・マルクスが指摘した資本主義の内包する人間疎外により追い込まれる貧困、飢餓などで辛酸をなめる労働者の虐げられた姿を描いている。米階級社会の無慈悲で非人間的な本性を暴露することによって希求する社会の実現を目指したのである。

代表作は今回紹介する6作目の『The Jungle(ジャングル)』。徘徊するネズミの糞で、積まれた食肉が真っ黒となるほどの非衛生で劣悪な環境の食肉工場で低賃金、長時間労働で酷使・搾取される移民労働者が主人公である。腐敗した肉を薬品処理し、食肉に混ぜて加工し、ソーセージ、ハムなどとして全米へ出荷する驚くべき巨大食肉トラストの闇とその内実を明らかにした。

これは、当然のように全米を揺るがす一大スキャンダルとなり、世論は沸騰。単行本化されるとベストセラーに躍り出た。その結果、ソーセージ、缶詰などの加工食肉の売り上げは半減し、菜食主義者に転向する消費者も少なくなかった。

社会改革を進めていた当時のセオドア・ルーズベルト大統領は食肉トラストのこうした不正に少なからずショックを受け、関連の法律を策定し、議会に諮り、業界の抵抗を押し返して成立させた。市民の健康に直結する非衛生な製造工程を一掃し、健康や安全を重視する食肉工場へ変身させた。

シンクレアの作品が社会を改革する起爆剤となった構図は、ターベルの『スタンダード石油の歴史』が傍若無人な石油トラストの行動様式に切り込み、これを正したのと同様である。

タイトルの『The Jungle(ジャングル)』はどのような意味なのか。資本主義社会は弱肉強食、優勝劣敗、適者生存などの冷酷な掟が支配する熱帯雨林の中で猛獣たちの繰り広げる血も涙もない生存競争の場、いわばジャングルのようなもの。労働者は血も涙もない強欲な資本家に搾取され、虐げられ、しゃぶりつくされて死んでいくとの意味合いが込められている。

では、なぜ、シンクレアが当時流行していた調査報道を専門とするジャーナリストの呼称であるマックレイカーと呼ばれたのか。それは闇に包まれていた食肉トラストの驚くべき反社会的な行為を調査報道により初めて明らかにし、その主張が世論、そして政府を動かし、社会改革を促した。小説ではあったが企業の悪行を糾弾するジャーナリズムと理解された。

そして、これが、利益、カネが何よりも優先する米国資本主義の象徴、巨大トラストの体質を根底から変えたのである。作品が米国を大きく変える起爆剤になった。

もっとも、ペンの力が企業の闇を暴露し、正したのはこれが初めてではなかった。直前に

ターベルが当時の米石油業界を支配していたジョン・ロックフェラー率いる巨大トラスト、スタンダード石油の倫理にもとる犯罪的、反社会的な行為を既に次々と明らかにしたのは既に触れた。ロックフェラーの犯罪的経営手法は、米司法当局が告訴し、米最高裁により反トラスト法違反で解体判決を受けることになる。これに次ぐ巨大トラストの一大スキャンダルとっていいだろう。

それ以上に、シンクレアの暴露は、市民の毎日の食卓を飾り、自分たちの口に入る食肉、つまり、全米の市民の健康に直結するものだっただけにその分、衝撃度は大きかった。市民らは、反社会的な行為が石油業界のみならず食肉業界にまで及んでいることを知り、大いに驚き、企業そして行政の責任を問うたのである。

これを受けて米政府が調査に着手すると、実態はシンクレアの暴露した姿よりもさらに深刻であることが判明した。世論は一段と沸騰したのは当然といえよう。こうした経緯もあって本人の意向はともかくとしてシンクレアは当時のジャーナリズム界をリードしていた社会改革を目指すマックレイカーに分類されたのである。

第2章、シンクレアとは

『The Autobiography of Upton Sinclair(アプトン・シンクレア自伝)』などによると、シンクレアは、1878年9月20日にワシントンD.C.に隣接する東部メリーランド州ボルチモアに生まれた。父は英国からバージニア州へ移住。酒類の販売を手掛けていた仕事の関係からアルコール依存症でこれがのちの酒類を極端に忌諱する性格形成に多大な影響を及ぼした。

一族は軍人が多かった。徳川幕府が開国に向けて大きく動き出すきっかけとなった1856年の神奈川県・浦賀への黒船来航では、米東インド艦隊の司令官ペリーが率いる4隻の軍艦のうち1隻の艦長が先祖であった。猪口孝著『猪口孝が読み解く『ペリー提督日本遠征記』』の中に「シンクレア少佐率いるサプライ号」との記述がある。もともと、裕福だった一族は、南北戦争(1861~65年)で全財産を失う。

敬虔な監督教会に通う厳格な性格の母親は米南部の裕福な家庭の出身で、「王冠を賭けた恋」で知られる英国王エドワード8世のシンプソン夫人は一族に当たる。

シンクレア研究家の中田幸子は著書の『アプトン・シンクレア―旗印は社会主義』の中で、「(シンクレアの)潔癖で、理想を追い求め、虚偽や不正を憎む性向は早い時期から成長した」と語っている。

一家は1888年にニューヨーク市へ移転、シンクレアは地元の小学校へ。興味深いことに14歳の92年にニューヨーク市立大学へ入り、97年にはコロンビア大学へ進んだ。在学中に評論などを書き始め、詩人を目指して1900年に卒業。この頃、幼馴染と結婚した。

翌年には長男が誕生し、初の小説『春と収穫』を世に問う。02年には調査報道の先駆者

のネリー・ブライが単独インタビューで取り上げた無政府主義者エマ・ゴールドマンと親交のあった社会主義者ゲイロード・ウィルシャーの記事に触れる。その時、24歳。シンクレアは、これを「私の心に刑務所の壁が落ちるようだった」と後年評している。

ピューリッター賞作家のDoris Kearns Goodwinは、著書の『Bully Pulpit(素晴らしき演壇)』の中で、シンクレアは社会主義こそがこの国の不正を正す回答だと結論付け、これが傾倒するきっかけだったと分析している。

シンクレアの出世作となる『The Jungle』は、社会主義系の新聞『Appeal to Reason(理性への訴え)』に連載の形で1904年2月から始まった。直後から注目され、新聞の発行部数は20万部近くまで伸長し、同11月まで掲載された。06年に単行本で発売され、ベストセラーとなる。

執筆の切っ掛けは同紙の編集長フレッド・ワレンからの要請である。シンクレアが前年に出版した南北戦争での黒人奴隷問題をテーマにした長編小説『マナサス』に感銘を受けたワレンが連載物の執筆を依頼。シンクレアは工業化時代に突入した現在、労働者が賃金奴隷と化した全米最大のシカゴのパッキングタウン(packing town)を題材に選んだ。これは、ストライキで解決を目指した地区の争議が挫折で終わり、その後の動向にシンクレアが関心を寄せていたことと関係がある。

食肉産業の一大工業団地で、牛や豚などの家畜を屠畜後、精肉し、あるいはハム、ソーセージなどに加工、パック(pack)後、消費者向けに出荷する食肉トラストの工場がある。

シンクレアは7週間程度滞在し、労働者らに取材、身分を隠して潜入取材した。興味深いことに、この時、ロンドンの医学雑誌として知名度の高い『ランセット』の専門記者アドルフ・スミスが同行していた。記事には、食肉関連の衛生問題に詳しいスミスの見解が見事に反映している。

第3章、プロパガンダ小説

米国文学の解説書に目を通すとシンクレアの作品は、プロパガンダ(政治宣伝)小説と表現されている。プロパガンダは、心理学者ジークムント・フロイトの甥で「広報の父」とされるエドワード・バーネイズ著『プロパガンダ』によると、「政治的目的やものの見方を押し進めるために利用される情報」「とりわけ偏りがあり、誤解を招くような性質をもつ」と解説している。

これはシンクレアが、カリフォルニア州知事選に出馬した一時期を除くと米社会党に所属、社会主義社会の実現を目指す小説を執筆し続けたからである。

大きな反響を呼んだのは、登場する移民労働者らの置かれた立場があまりにも悲惨で残酷、しかも衝撃的だったこと。加えて精肉、ハム、ソーセージ、缶詰など扱った食肉関連製品が

驚くほど非衛生的な環境の中で製造されていることも明らかになり、毎日これを食べている自分たちの健康に被害が及んでいるのではないかと切迫感をもって受け止められたこと尽きる。臨場感あふれる作品は、共感を呼び、一気にベストセラーへ躍り出た。

当時のルーズベルト大統領は、全米の市民が関わる深刻な政治問題として敏感に反応した。背景には自身が義勇軍を募って参加した米西戦争で軍から提供された食肉缶詰が原因で兵隊が食中毒になったこともあり、他人事ではなかったのである。

作品の中身や思想的な立場を考慮すると、作品は治安維持法下で社会主義、共産主義が弾圧された1930年代にプロレタリア作家で名を馳せた小林多喜二が思い浮かぶ。作品の多くが虐げられた労働者の厳しい生活の紹介し、労働者の搾取により豊かで裕福な生活を送る資本家たちなど資本主義に根差す残酷な体質の糾弾をモチーフとしている。

多喜二は、論調が国家体制を否定するものだとして治安維持法（1925年）違反で特高警察により逮捕され、警視庁築地署での取り調べ中の拷問により1933年2月に殺害されたことはあまりにも有名である。

シンクレアも社会主義を信奉する米社会党のメンバーとして政治活動も続けていた。作品の多くは、社会主義の良さを広く啓蒙し、体制転換を希求するプロパガンダ（政治宣伝）小説とみなされていた。

ここで取り上げる『The Jungle』も米ジャーナリズム界の最高の栄誉とされるピューリッツアー賞の候補に当時上ったが、社会主義社会の建設というあまりに政治性が強すぎることから選考の過程で漏れた経緯がある。もっとも、100冊近くの著書のあるシンクレアの評価がゼロというわけでは必ずしもなく、政治色の薄い『Dragon's Teeth(龍の歯)』が1943年に同賞に輝いた。

創設した米新聞王ジョセフ・ピューリッツアーの意向で汚職、腐敗など社会的な不正の暴露や社会正義の実現のために貢献した記事に贈られるのが同賞だが、政治色は忌諱されるようである。

多喜二には、1000人以上の共産黨員らが検挙された日に焦点を当てて特高警察の拷問を微に入り細に入り記述して大きな反響を呼んだ小説『1928年3月15日』などもある。代表作は戦後に映画にもなった『蟹工船』である。ロシア・カムチャッカ半島近くのオホーツク海で荒波に揉まれて伴走する小型船の漁獲したカニを缶詰などに加工する施設を持った大型船を舞台にした資本家にこき使われる労働者の物語である。

作業には労働者を人間扱いしない現場監督のピストルなどによる暴力・暴行が横行し、楯突けば凄惨なリンチを受ける。素行や働きのよろしくない、反抗的な労働者は狭い便所に監禁され、あるいはワイヤーで体を巻かれ、ウィンチで宙吊りされるなどの虐待を受ける。多くの労働者は抵抗さえできず、監督の言いなり。まさにタコ部屋である。

ノーマ・フィールド著『小林多喜二』によると、逃げ場のない船内で、低賃金でこき使われる労働者の姿の一連の描写が大きな反響を呼び、英語、中国語、韓国語、ロシア語、イタリ

ア語、チェコ語、ポーランド語、ベトナム語に翻訳された。

人権が尊重されることもなく労働法制もデタラメだった当時は搾取で焼け太る資本家と骨の髄までしゃぶられる労働者は好対照をなしていた。

作品の中の登場する宮中へ献上される缶詰に「石ころでも入れておけ」とのセリフが天皇の尊厳を冒とくする治安維持法の不敬罪に当たるとにらまれ、起訴の対象となった。

『蟹工船』の最後が象徴的である。悲惨な環境に労働者が目覚め、力を合わせてストライキで対抗したものの当局の強硬な弾圧であえなく挫折する。ストライキでの対抗を決意するシンクレアの『The Jungle』の結末とは対照的である。

小樽高等商業学校の卒業後に北海道拓殖銀行に入行した多喜二は、高商時代から続いていた文筆活動を続け、労働争議や共産党員の普通選挙への出馬などでも応援していた。

共産党員でもあった多喜二は、作家であると同時に日本プロレタリア作家同盟の書記長も務めていた。既に触れたようにシンクレアは民主党から1943年のカリフォルニア知事選へ一時、立候補した時期はあったもののそれを除くと一貫して米社会党員だった。20代から左翼系の活動をしていたことも2人は似通っている。特高による拷問で多喜二が29歳と短命だったのに対しシンクレアは90歳まで生きた。

多喜二の『蟹工船』（1929年）が悲惨な労働環境の中で資本家、経営側による理不尽な仕打ちに虐げられる労働者らを取り上げて、社会主義革命を鼓舞したのに対しシンクレアの『The Jungle』は、アメリカンドリームの実現を夢見て、はるか東欧から渡ってきた若者にスポットライトを当てた。英語もろくにしゃべれず、血も涙もない激しい生存競争の中で突然生きることを余儀なくされ、弱肉強食の支配する初期資本主義に翻弄される若者を描き、社会主義社会への移行の必然性を説いた。

第4章、フェビアン協会

シンクレアは斬新な社会改革を説く穏健な英国のフェビアン主義を信奉していた。東京都立大教授の関嘉彦の『イギリス労働党史』によると、英労働党のバックボーンであるフェビアン主義とは、19世紀後半に創設された社会主義団体のフェビアン協会がベース。

創設者は、無名の米思想家だが、中心となって活動したのが英労働党の代議士でもあったシドニー・ウェブとその妻ベアトリス、政治学者グレアム・ウォーラスなど。ノーベル賞作家のバーナード・ショーなども入会し、英知識人が集っていた。

協会の名称はローマがカルタゴと戦ったローマの勇将ファビウスにちなんでいる。卑怯者と罵られるのを意に介さず退却を重ね、最も有利な地点に敵を引き付けて一挙にこれをせん滅した知恵に長けた武将である。これを範に猛心を避けて慎重に社会改革するよという意味が込められている。

もっとも協会の目指す社会主義の具体的な内容についてはパンフレットで、「貧困の原因を資本所有の生み出す不平等に求め、資本の公有化こそ救済策」と述べる程度であり詳しく言及していない。

関は、「英国人の伝統的な経験主義を土台とし、ピューリタン革命以来の英国の民主主義の伝統である自由と平等及び協力の理想を達成することを目的とする」「方法として自由放任を廃止して、国家の経済活動への統制の拡大を主張する」「議会の立法を通じて実現せんとする」などと規定している。

「階級闘争の結果、社会主義が必然的に到来するという考え方」を否定した穏健なフェビアンにシンクレアが共感を抱いた可能性がある。そうした観点からは多喜二とは大きな開きがあるともいえるだろう。

多喜二とシンクレアの各作品が労働者にとってこの世の生き地獄といっても過言ではない非人道的で悲惨な労働現場を告発する内容だった。シンクレアの米国では当時のルーズベルト大統領が指導力を発揮し、労働現場の待遇改善につながる法制度を整備した。健康に寄与する衛生的な食品が市民に提供される体制が実現したのである。これに対し、日本政府は関心さえも寄せなかった。むしろ、共産主義の信奉者は体制転覆を目指す国家にとっての脅威とみなされ、摘発の対象となった。

無類の悪法の治安維持法により逮捕され、拷問を受けるなど言論弾圧、人権弾圧が一段と進行。はては全体国家へと突き進み、先の戦争へ日本が突入することになったのはご存知の通りである。日米で国家の体制などに違いがあったのは、確かであるが、言論の自由や民主主義を尊ぶ政治家の嗅覚の大切さを痛感する限りである。

第5章、『The Jungle』とは

では、出世作となる作品はどのような内容だったのか。紹介しよう。全体が31章で大きくは前半と後半から構成される。

前半は、米国・シカゴへ移住したリトアニア出身の主人公ユルギス・ルクドスらが地区の食肉工場に職を見つけ、働きはじめ、劣悪な労働環境、低賃金、長時間労働で搾取されながらもなんとか生きていく過程を扱っている。途中から歯車の回転がおかしくなる。最終的には解雇され、浮浪者生活へ転落する。これが第1章から第16章あたりまで。

後半は組合の内情を知り、理念に感動する。だが、会社の誘いに迎合し、組合弾圧のスト破りへ加担する。最終的には会社側に裏切られ、浮浪者の生活に舞い戻る中で社会党の集会へ顔を出したことをきっかけに運動にのめり込む。身も心も社会主義活動に捧げる闘士に変身するのが第21章から第31章の最終章までである。

異例にも各章に見出しは付記されていない。第1章は、移住して4カ月後に開かれた主人

公ユルギスとオーナの結婚披露宴。見出しをつけるとしたら「ユルギス・オーナが披露宴」のあたりだろうか。披露宴はユルギスらの働く移民の多い地区の安酒場の小さな部屋で開かれた。100年前のシカゴは既にニューヨークに次ぐ全米第2の都市に育っており、米国の一大食肉産業の中心地でもあった。

全米から集められた牛、豚、羊など食肉用家畜を一時的に保管するストックヤード（家畜場）がひしめいていた。屠畜され、精肉あるいはパック（梱包）して出荷される。ハム、ソーセージなどに加工する工場も数多くあり、パッキングタウンとも呼ばれていた。多くが海外からの移民だったから移民地区の意味合いもあった。

開かれた宴は新郎新婦の親戚や友人が集まるお祭り形式で、同郷の仲間らが大勢顔を出してくれた。部屋は通常、労働組合の会議などに使われる小さな部屋で、組合本部とも呼ばれていた。ここを借り切ったのリトアニア式祝宴である。

部屋のテーブルには料理を盛った大きな皿がビールやワインと一緒に並んでいた。楽器の演奏が始まるとこれに合わせて皆が踊り出し、お祝いのスピーチも始まった。夜遅くまで続く饗宴だが新郎新婦とも翌日の仕事は放免されていない。移民労働者の立たされたつらい立場を示している。

一族はなぜ、移住を決意し、シカゴを目指したのか。これを扱うのが第2章。故郷の市場で見初めた新郎新婦の出会いや住居を見つけるまでの顛末などユルギスら総勢12人の直面する新生活などを描いている。「差別もなく自由な新天地が米国」と考えたのが最大の理由で、シカゴは同郷人がここで成功したことが大きい。第2章と第1章が時間的に逆転しており、「話の流れが適切ではない」との批判もある。筆者も戸惑った。

待望の職場に就いた主人公らの拠点となったパッキングタウンは第3章で説明されている。地区には総延長250マイル（400km）の鉄道が網目のように敷かれ、林立する工場では合計数100人の労働者が毎日1万頭の牛と豚、5000頭の羊などを処理している。

家畜を工場内へ追い込み、大きなハンマーで殴り殺した後に大きなナイフで解体。逆さ吊りで滑車に乗せ、流れ作業で処理する。鼓膜が破れんばかりの家畜の悲鳴が響く工場の床には血があふれ、異臭が漂う。この中で黙々と作業する。

主人公ユルギスの仕事については第4章で紹介している。熱い血の海となった工場の床の上で牛の内臓を嬉々として処理する。日給は1ドル50¢。やや遠いながらも土地付き1500ドルで小さな家が売り出されているのを広告で知り、購入を決意する。

工面すれば頭金300ドルは何とか払える。月々の支払いが済めば自分のものになるから家賃9ドルを払い続ける今のアパートよりはましと考えたからである。契約書にサインする。だが、これは、英語もろくにしゃべれず米国の事情に無知な移民を食い物にしたイカサマの物件だったから後日、それまで支払った金をすべてだまし取られることになる。

働き出すと組合から勧誘が来る。労働者の権利などについて説明を受けるが意味が分からず、距離を置く。

食肉には適さない牝牛やケガをした牛などが集められ、製品として出荷される不正を知るのが第5章。第6章では、相談に乗ってくれた米国の諸事情を熟知する老婆から契約したマイホームが典型的な詐欺と教えられる。落胆するもののユルギスはこれも運命と考え、家族の団結で乗り切ることを決意する。

第7章は、前半が冒頭を飾った11月下旬の結婚披露宴の翌日から仕事を余儀なくされる夫婦の通勤での切符のトラブルで、後半では、気温がマイナス20～30度まで下がる厳しい寒さにもかかわらず工場には暖房もなく、肺炎、インフルエンザ、結核で労働者がバタバタ倒れる現場を紹介している。

社会主義のプロパガンダ小説と評される『The Jungle』だが、第8章でやっと本格的な労働組合の活動が登場する。主人公の妻オーナのいとこマリアの働く缶詰工場が突然閉鎖され、失職する。マリアが加入する組合の「団結することで立ち上がり、会社側を打ち負かすことができる」という発想をユルギスは知り、共感、同時に米国がなぜ「自由の国」といわれるのかの意味を初めて実感する。ユルギスは改宗者のような誠意と熱意を抱いて組合活動の宣伝などに取り組み始める。組合活動は十字軍の一種との記述もある。

第9章では組合活動を通じて、ユルギスが市民権、民主主義、帰化とはどういうことか、詐欺とは何かなど米国での生活で必須のさまざまな常識を体得する過程を描いている。並行してユルギスが知った会社側の恐るべき不正がずらりと並んでいる。

「チキン」との表示の缶詰に混入されているのは実は、牛の胃と心臓、牛と豚の脂肪、仔牛の屑肉など。「辛味ハム」は燻製ビーフの屑肉、薬品で着色された牛の胃袋、ハムとコンビーフの切り落とし、皮のついたジャガイモ、咽喉肉が原料。売れ残りの古い腐りかけたバターは酸化させて悪臭を取り、スキムミルクをまぜて再度販売する。ラムやマトンの肉が実際はヤギの肉など。ぞっとする話ばかりだ。

第10章では、妻のオーナが長男アントナスを出産してユルギス家につかの間の幸せが訪れる。第11章でそれが一転。ちょっとした油断から負ったケガが治らずユルギスの収入は激減。困窮生活に転落するのが第12章。極貧からの脱出のため手を尽くした結果第13章でこの世の地獄とも呼ばれる最下層の労働者の働く強烈な悪臭の肥料工場に仕事をみつける。

「ほかに使い道のないほど肉が腐敗したときは缶詰にするかソーセージに刻み込むかのいずれかが慣例になっている」との驚くべき記述でスタートする第14章は食肉トラストの不正のオンパレードである。全米を震撼させたパッキングタウンの生々しい食肉関連の一連の不正が暴露される。全米の世論が沸騰し、政府が調査に乗り出すきっかけとなった箇所である。

朝食後に全身をけいれんさせて死んだ発育不全の幼児の悲報が登場する。原因は、輸出向きでないと判定された結核菌入りのスモークソーセージのようだ。①すっぱいにおいの豚肉はソーダで揉んで臭い抜きし、酒場の酒の肴として売りつける②ハム用豚肉の塩漬けでは時間を節約し、能率を高めるため、中空の太い針を刺しポンプでつけ汁を注入③工場にいられ

ないほどの悪臭を放つ肉には、これを消すため強力なつけ汁を用意④燻製ハムの不良品は腐敗部分が付着している骨を抜き取って、空洞部に白熱化した鉄棒を挿入、これによって「一級品」「二級品」「三級品」の区別がなくなり、すべて「一級品」となる⑤全体の腐敗したハムはカッターで切断され、他の肉と混ぜ合わせると悪臭は消える⑥カビが生えるなど欧州から返品された古いソーセージは、ホウ砂とグリセリンを添加されて国内向けに再製品化される。

このほか細切れ豚肉をケーシングに詰めたのが「ボンレス・ハム」、大きな関節だけがついたままの肉をほとんど切り取った肩肉で作られているのが「カリフォルニア、ハム」、「皮なしハム」は皮が厚く硬いよぼよぼの豚が材料などと知られざる業界の秘話を集めている。

肉が転がり落ちるのは、作業員が結核菌を吐き散らした泥とおが屑まみれの床の上。雨漏りする工場内には数1000匹のネズミが駆けずり回り、積み上げられた肉の上にその乾いた糞が払い落せるほど乗っている。退治に毒入りパンが仕掛けられ、死んだネズミとパンが食肉と一緒に燻製ソーセージなどに加工される。

用を足した作業員は、手洗い場もないのでソーセージに汲みいれる水で手を洗う。こうした記述がこれでもかこれでもかというほど綴られている。作品を通じて劣悪極まる食肉産業の現状を知れば世論が沸騰するし、ルーズベルト大統領が動いたのは至極当然と言える。

ユルギスは自由な国への移住により、健康な生活と子供の健やかな成長を夢見ていた。だが、まともな仕事にも就けず、夢がすべて失われる現実に直面する。逃げ場のないユルギスは酒へ逃避する。

資本主義の厳しい現実には家族にも襲いかかる。第15章、第16章はわずかな収入のため長時間労働に就く妻オーナが現場監督に脅迫され、外泊する。暴行されたことを知ったユルギスは、半殺しの目に合わせる。警察へ連行され、裁判の結果、刑務所送りとなる。この結果、不動産屋への月々の支払いが滞り、第6章で触れたマイホームを失ってしまう。

第17章から第23章では無一文となったユルギスが浮浪者へ転落。拘置所で知り合った金庫破りとの小銭のためにおやじ狩りするまでに落ちぶれる。この間難産で赤ん坊を失ったばかりか医者も呼べず、オーナを亡くす。

その後、仕事を見つけるものの工場が閉鎖となりユルギスは再び失職。悪いことは重なるもので長男アンタナスも不慮の事故で失う。不幸はユルギスにも襲い、交通事故に見舞われる。働けず貯えは底をつき、シカゴを離れ、農村で物乞い生活に入るが結局シカゴへ舞い戻る。

つかの間の幸運もあった。24章、25章では若い紳士と出会い、中世の城郭のような豪華な屋敷に招かれるが、紳士が寝込むと同時に執事に追い出される。紳士からかすめた100ドル札を酒場で両替しようとしてトラブルとなり、暴力沙汰へ発展。再び警察署へ。刑務所では金庫破りと再会、シカゴの犯罪・売春組織などを知り、地元の不正選挙にもかかわる。

第26章、27章では再び組合が登場する。今度は会社の手先となったユルギスがスト破り

に加担する。だが、オーナを暴行したパンキングタウンの現場監督と偶然接触し、再び暴力を振るい、警察に捕まる。出所後は浮浪者へ逆戻り。ゴミ箱を漁り、野菜を泥棒し、飢えを凌ぐ。そうした中で生活のため売春婦に身を落とした麻薬中毒となったマリアとばったり出会う。

最終の第28章から第31章まではユルギスが社会主義者として目覚める道程である。社会党の集いに偶然紛れ込む。労働者の権利を説く力強い弁士の演説に共感。ユルギスは、「破滅の虎口から間一髪のところまで救い出された」「絶望の隷属状態から解放された」「自由になった」と感激する。これを直に伝えると弁士は同郷の家族持ちの男性を紹介してくれた。その夜は、男の自宅へ泊り、社会主義のイロハを伝授してもらう。

転向を決意したユルギスは社会主義を信奉する企業家の経営するホテルのポーターとなる。演説会に講師として出かけるようになり、演説も次第に上達する。

最終章は、大統領選の前日知り合いの紹介でスウェーデンから移住した社会党支持のインテリなど数人の集まりにユルギスが参加するシーンがある。宗教、階級闘争、国家、競争などに対する社会主義者の見解や資本主義の弊害、矛盾、搾取される労働者などについてのやりとりが綴られており、社会主義の理論を学べる構成となっている。

では、大統領選の結果はどうだったのか。1年前は500票だったパッキングタウンの得票数が6300票を突破。対する民主党は8800票。開票状況を見守る社会党の会場の壇上の弁士は、「シカゴは今やアメリカ全土の先頭に立っている」「シカゴは社会党の新しい目標を掲げ、労働者の進むべき道を示したのだ!」と絶叫。最後は、「シカゴはわれわれの手に落ちる! シカゴはわれわれの手に落ちるのだ」とシカゴで社会主義社会の実現を期待する結びで終了している。

スペースがなくなってきたので、今回はここで終了する。次回は、作品を深刻に受け止めた大統領にホワイトハウスへ呼び出されて面談。食品トラストに大ナタが振るわれる事態に発展したことを紹介する。

『The Jungle』は、実は、当時の日本でも注目されていた。冤罪で知られる大逆事件で死刑となった幸徳秋水らが機関誌などで紹介していた。シンクレアの作品にまつわる日本の動きなどもまとめる。

【参考文献】

- ・アプトン・シンクレア著『アメリカ古典大衆小説コレクション5-ジャングル』(松柏社、2009年、大井浩二訳、亀井俊介/巽孝之監修)
- ・猪口孝著『猪口孝が読み解く『ペリー提督日本遠征記』』(NTT出版、1999年)
- ・糸屋壽雄著『幸徳秋水一人と思想』(清水書院、1973年)
- ・糸屋壽雄著『幸徳秋水研究』(青木書店、1967年)

- ・糸屋壽雄著『管野すが』(岩波書店、1970年)
- ・江口圭一著『昭和の歴史第4巻 十五年戦争の開幕』(小学館、1982年)
- ・エドワード・バーネイズ著『プロパガンダ』(成甲書房、2010年、訳・解説中田安彦)
- ・小林多喜二著『蟹工船』(ほるぷ出版、1980年)
- ・関嘉彦著『イギリス労働党史』(社会思想社、1969年)
- ・中田幸子著『アプトン・シンクレア―旗印は社会主義』(国書刊行会一、1996年)
- ・中田幸子著『父祖たちの神々―ジャック・ロンドン、アプトン・シンクレアと日本人』(国書刊行会、1991年)
- ・ノーマ・フィールド著『小林多喜二』(岩波書店、2009年)
- ・Anne Bausum *Muckrakers* National Geographic,2007)
- ・Doris Kearns Goodwin *Bully Pulpit—Theodore Roosevelt, William Howard Taft and the Golden Age of Journalism* Simon&Schuster,2013
- ・John M. Harrison & Harry H. Stein *Muckraking* The Pennsylvania University Press, 1973
- ・Upton Sinclair *The Jungle* Harper& Brothers,1951
- ・Upton Sinclair *The Autobiography of Upton Sinclair* Harcourt, Brace & World ,Inc.1962
- ・Upton・Sinclair *The Brass Check- A study of American Journalism* Johnson Reprint Corporation,1970

(続)